5. 旧呑川の流れ

旧呑川とは元々呑川の本流で、「かんまがり」と言われる急カーブ辺りから東に流れ、現在の大森南図書館の南側を流れ、その流れの向きを変えながら今の藤兵衛橋付近から東に流れ東京湾に注いでいました。

江戸時代に書かれた「新編武蔵風土記稿」の中に、元禄 16(1703)年の大地震により流れが変わったと書かれており、「かんまがり」の北側に流れていた「座頭川」に流れ込んで東京湾に注いだ。その流れが呑川となった。この流れこそ呑川の本流であった(右上の地図)。ここにある「座頭川」については歴史の項で詳しく述べることとします。

大正・昭和にかけて現在の城南地区と言われる地域に人口が急増した。その大きな出来事は大正 12(1923)年に起きた関東大震災であります。比較的被害が少なかったことと、JR の京浜東北線、京急の京急本線と穴守線、東急の東横線、目蒲線、池上線など都心へのアクセスが良い交通網の整備などもあり人々が移り住むようになり、森の木は切られ、田畑は埋められ住宅地・工場などに変わっていきました。この事は大地の保水力を奪い、雨が降るとその水のほとんどは川に流れ込み、たびたびに洪水を起こすようになりました。特に台風による被害は増大しました。

呑川の中流・下流地域の大森区・蒲田区の住民はそれぞれの町や東京府・東京市に対し洪水対策を繰り返し陳情していました。その結果、新呑川の開削が決定し、昭和 7(1932)年から開削工事が始まり、昭和 10(1935)年に工事が完成しました。同時に夫婦橋上流から池上養源寺橋までの区間の拡幅工事を予定していましたが、支那事変、太平洋戦争と続く戦争の影響により拡幅工事が中断されたことにより、新呑川の開削だけでは洪水は無くなりませんでした(右下の地図)。

蒲田町史の「面目一新の呑川」の項で、「従来呑川の下流は、神戸橋の下流に於いて、羽田田圃を一直線に東進し、藤兵衛澪に注ぐ新河川を改修(従来の呑川は其儘存置)するのである。而して其幅員は二十七メ ートル二七で、その深さは十四メートル半であるから、城南の地に於いて、希観の一大運河を現出し、可なり大きい船

舶が航行するのだ。(中略)故に該工事竣成の暁には、ただに呑川の面目を一新するのみならず、舊蒲田町の景観をも、一変するに至るであろう。」このように書かれています。

戦後の復興が進む中、呑川の拡幅工事も行われるようになり、昭和 40 年代に入ると呑川の氾濫による水害は無くなりました。

上記のような内容を考えると、旧呑川という呼び方は戦後になってからのものだと思われます。

この旧呑川は新呑川が開削されるまでは呑川の本流でした。元禄の大地震前後から大森沖での海苔漁業が発展してきました。この流れを変えた呑川の沿岸は海苔漁業の大きな基地となり、また両岸には海苔船が連なって係留され、広い土地にはたくさんの海苔が干されていました。ここで作られた海苔は「大森海苔」というブランド海苔として流通していました。

旧呑川の河口付近（撮影年次未詳）写真提供：大田区立郷土博物館

昭和20(1945)年4月の東京大空襲によって、呑川沿岸を含んだ城南地域は殆どが焼き尽くされました。それでも戦後の復興の中で、この「大森海苔」も復活しました。右上の写真は河口近くの両岸に係留されたノリ舟と竹ヒビ。右中の写真は潮見橋下流付近に広がるノリ干し場。右下の写真はかんまがり近くで新造船の進水式 を見守る人々。

昭和 38 年 1 月頃の旧呑川 写真撮影：田中守男氏 【大田区立郷土博物館】

戦後の復興が進む中で、保水力のなくなった呑川周辺は湧水の流入は少なくなり、一方家庭からの排水の流入が増大しました。工場排水も流入するなど呑川だけでなく東京の河川の水は汚れ、その結果東京湾の水も汚れていきました。戦後の復興、日本が高度成長時代に向かう中、海は汚れ、東京湾の埋め立て、京浜運河の開削など、大森海苔の養殖現場の環境は次第に悪化していきました。特に昭和 39(1964)年の東京オリンピックの開催に向けた取り組みは東京湾の環境をより悪化させました。このような状況の中、昭和37(1962)年に海苔業者は「漁業権」を放棄し、翌昭和 38(1963)年春の収穫をもって江戸時代から

昭和 32 年新造船初船出 「かんまがり」付近の旧呑川 写真提供 松原秀章氏

続いた「大森海苔」も終焉を迎えました。この事がその後の旧呑川の運命を変えました。

戦後近代化を目指す東京都は下水道の普及に力を入れてきました。源流が無くなった中小河川、田畑の利用が無くなった用水路などが埋め立てられ下水道化していきました。自然流下の下水道にとって、河川・用水路は自然の傾斜もあり、土地買収の必要もなく費用も安くできること、周辺住民の「悪臭被害」に対する要請などもあり、蓋掛けが進んでいきました。

海苔漁業が終わった旧呑川は、汚れた水路だけが残され、周辺住民の要請などもあり、徐々に埋め立てられました。

写真提供：大田区立東蒲中学校

右の写真は「大田区立東蒲中学校・開港 80 周年記念誌」に掲載された昭和 35(1960)年の写真であります。この時代はまだ大森の海苔漁業が行なわれており、海苔船が旧呑川を往来していましたが、この写真によるとすでに一部は暗渠化されていたようです。

上記記念誌の同校沿革の中で、東蒲中学校は昭和 33(1958)年 11 月 1 日に現東蒲小学校(大田区東蒲田 1 丁目 18 番)から現在の場所(大田区東蒲田 2 丁目 38 番)に移転してきたもので、「昭和 36(1961)年 11 月、旧呑川埋立地 358 坪払下げ、三角地350坪を購入。」「昭和 41(1966)年 3 月三角地埋立て工事完了」と書かれています。

このように旧呑川は昭和 40 年頃から埋め立てられ、昭和 40 年代の後半に埋立ては完了したものと思われます。そしてその後昭和50年代に順次緑地として整備されていきました。桜並木を残し、広い場所には子供の遊具を設置するなど旧呑川緑地として遊歩道に整備されました。以前から植えられていた桜並木は訪れる人々に春の花見を提供していました。こうしてみると旧呑川と呼ばれた期間は、長くても新呑川完成以来の約40年弱であったと思われます。

元鷹の橋より下流側を見た呑川緑道（旧呑川）

一方海苔養殖業者の皆さんは、海苔干し場というかなり広い土地を持っていたので、その土地は、当時日本は「高度経済成長時代」に入っており、工場用地や、この「高度経済成長時代」を支えた地方出身の若い労働者などに住居を提供するアパートなどに転用されました。

海苔漁業が終わって川が埋め立てられた後も、このように日本の高度成長時代を支える土台ともなっていました。同時に桜を含めた木立や花々が植えられ、子供の遊具も作られた遊歩道は周辺住民の憩いの場でもあり、訪れた区民の心を和ませています。遊歩道の中には「旧呑川緑地」のモニュメントが作られ、一部の橋の親柱、産業道路に架かる「川下橋」、羽田道に架かる「呑川橋」が今でも残されています。

春の旧呑川緑道　　写真提供：大田観光協会

遊具もある春の呑川緑道　　写真提供：大田観光協会

呑川緑道（旧呑川）に残る川下橋（上流側より）

呑川緑道（旧呑川）に残る呑川橋（下流側より）

【参考文献】　○大田区史　○蒲田町史

○新編武蔵風土記稿

○海苔のこと　大森のこと　　元大森海苔漁業養殖者＋編集委員会編

○わが住む町、わが故郷 “その昔を語る” 集い　　大田区立大森南図書館　編

○大田区の文化財　22集　口承文芸

○大田区の文化財　24 集　地図で見る大田区(1)

○大田区の文化財　24 集　地図で見る大田区(2)

【写真提供】　○大田区立郷土博物館

○大田観光協会

○大田区立東蒲中学校

○松原秀章氏(西糀谷在住)